

Philostrate の系譜

——Master of the Revels と John Lyly——

成沢和子

“The Genealogy of Philostrate : Master of Revels and John Lyly”

ウィリアム・シェイクスピアの『夏の夜の夢』第五幕第一場、アセンズの公爵シーシウスはアマゾンの女王ヒポリタとの結婚式を、紆余曲折の末めでたく結ばれた2組の恋人たちと共に執り行う。その宴の宵、「夜食から新床に向かうまで、3時間あまりの待ち遠しい時間」を埋めてくれる趣向を、祝宴係りのフィロストレイトに命じる。

Theseus: Come now, what masques, what dances shall we have,
To wear away this long age of three hours
Between our after-supper and bed-time?
Where is our usual manager of mirth?
What revels are in hand? Is there no play,
To ease the anguish of a torturing hour?
Call Philostrate.

Philostrate: Here, mighty Theseus.
(MDN, V, i, 32-38)

チューダー朝の宮廷は、総取締役の宮内大臣 (Lord Chamberlain) のもとに幾つかの部局があり、それぞれ長官がいて必要な仕事を行っていた。中でも重要な宮廷の祝宴にかかわる一切を取り仕切っていたのが宮廷祝宴局 (the Revels Office) であり、その長官が祝宴局長 (Master of the Revels) である。アセンズの宮廷という設定ではあるが、フィロストレイトは、まさにチューダー宮廷の祝宴局長その人のように描かれている。その役割は祝宴の準備、余興の設定を中心に、宮廷のエンターテインメントに関する一切であった。特に、フィロストレイトも「私も下見をいたしました (I have hear ir over)」(V, i, 77) と言っているように、余興の選定

は大事な仕事の一つで、チューダー朝後期のエリザベス女王の時代には、自薦他薦、玉石混合の演劇をいちいち下見して、時にはだめだしなどもしながら選び出して女王の御前に供していた。当時の演劇関係者にとっては、宮廷祝宴局はパトロンであり、監督官庁でもあったわけで、その長官ともなれば演劇界に大きな権力を持つ、また利権も伴うポストであった。従って、宮廷に何らかの地位を得ようとする者たちにとって、祝宴局長の地位は魅力のあるものの一つであったことは間違いなく、それを目標にしていた者は少なくなかった。この小論では、その一人、宮廷の劇作家として活躍したジョン・リリー（John Lyly）の求職活動を通して、エリザベス宮廷の祝宴局とエンターテインメントの状況を描いてみたい。

宮廷のエンターテインメント

チューダー朝の宮廷カレンダーは、四旬節などの宗教的な儀式や五月祭などの伝統的な行事を織り込んで決められているが、初夏から秋にかけての季節は君主の地方への行幸(Progress)を中心に、そして晩秋から冬の間はクリスマスと新年の祝賀を頂点とした行事を中心に組まれている。「冬のシーズン」は10月31日の万聖節の宵から始まり2月2日の聖燭節に終わる。だが、エリザベス女王の時代になってからは、「即位の日（Accession Day）」である11月17日に、「馬上槍試合や馬上武術合戦、説教、それに教会の鐘の音とともに」¹⁾始まったといわれる。とくにこの日の呼び物は、女王や貴夫人たちの御前で行われたティルト（tilt）あるいはジョウスト（joust）と呼ばれる騎馬武者たちの槍試合である。これには武術の試合という要素のほかに、貴夫人の愛を求めて戦うという宮廷愛（courtly love）の要素も加味されており、中世のロマンスさながらの世界が展開された。女王の幼なじみであり、公然の恋人、後のレスター伯、ロバート・ダドリー（Robert Dudley, Earl of Leicester）は、即位とともに主馬頭（Master of the Queen's Horse）に任命され、馬上槍試合の花形騎士であった。

冬のシーズンのハイライト、12月25日のクリスマスから1月6日の十二夜までの12日間は、宮廷生活で最も華麗な日々が繰り返される。クリスマスのミサや礼拝、新年の女王への祝辞、贈り物交換会などの行事の合間を縫って、仮面劇、仮装、ダンス、そして劇の上演がある。この期間、宮廷は祝祭の雰囲気にあふれ、特に定められた「無礼講の王（Lord of Misrule）」がその「家臣たち」を引き連れて自分の「宮廷」を組織し、家来に「騎士」の位を授けたり、張り子の馬で「馬上槍試合」をさせたりのパロディーまであった。1551年のクリスマス・シーズンに「無礼講の王」になったジョージ・フェラー（George Ferrer）という人物は、「家臣」の日当や衣装代その他で299ポンドもの出費をしたという²⁾。

仮面劇（masque）はもっとも好まれた宮廷的なエンターテインメントで、種々の変形があるが、通常「登場」「演技」「ダンス」の三部からなる。「登場」では仮面と衣装をつけた人物が豪華な山車に乗って入場する。次に短い芝居や無言劇が披露され、最後にダンスになる。これには演技者と見物人共に、その場にいる全員が加わって踊る。記録に残るチューダー朝最初の宮廷仮面劇は、1501年、ヘンリー七世の皇太子アーサー（Prince Arthur）とスペインのアラゴン家の姫キャサリン（Catherine of Aragon）との結婚披露の席で行われたものである。緑の木の枝や花で飾った山車と貴石をちりばめた岩をあしらった山車が、それぞれ13人のきらびやか

な衣装と仮面を付けた貴夫人と騎士を乗せて登場し、音楽に合わせて演技が行われ、最後に山車から降りた演技者とその場の出席者全員によるダンスとなった。これ以後、仮面劇は宮廷の折々の行事や外国大使などの饗応の宴、特にクリスマス・シーズンには決まっていられるようになった³⁾。例えば、エリザベス女王即位の翌年1559年をとっても、仮面劇は9回も行われている⁴⁾。

仮面劇、仮装や馬上槍試合などは宮廷人たちが演技者であり見物人として参加する。ヘンリー七世は自ら仮面劇に加わることはなかったというが、父を継いで王位についたヘンリー八世は、もともと音楽の才能もあり、別の誰かに扮して演ずるということに興味を持っていたようである。1510年のクリスマスには、11人の近従たちと共に自らロビン・フッドとその一党に変装して、王妃キャサリンの部屋に現れたというエピソードがホルの『年代記』に記されている⁵⁾。彼女は夫の皇太子アーサー夭折後、兄に代わって王位についたヘンリー八世と再婚していたのである。エリザベス女王も、ダンスを好んだそうであるから、仮面劇の最後の踊りには加わっていたであろう。

このような宮廷人たちが主役のエンターテインメントに対して、芝居の上演には宮廷の外から「演劇人」を召し出して行う。「外から」といっても、ヘンリー八世のころには王室礼拝堂付きの聖歌隊やセント・ポール寺院の聖歌隊がこうした演劇上演の中心であったから、いわば宮廷の周辺の者がその役割を担っていたともいえよう。1509年ごろから23年ごろまで、王室礼拝堂の聖歌隊を指導していたのはウィリアム・コーニッシュ (William Cornish) であった。聖歌隊の指導者はしばしば少年たちに演じさせる芝居の台本も書いたが、この点に関しては1561年から65年の4年間その地位についたリチャード・エドワーズ (Richard Edwards) が最も有名である。64年から65年にかけてのクリスマス・シーズンには『デモンとピシラス』(*Damon and Pythias*) が上演された。1566年、オックスフォードで女王の御前で上演されたといわれる『パラモンとアーサイト』(*Palamon and Arcite*) は台本が現存しないが、チャーサーの「騎士の物語」から取ったものらしい。エドワーズの後を継いだウィリアム・ハニス (William Hunis) は、76年から81年までの5年間、ウインザーの王室礼拝堂付き聖歌隊の指導者リチャード・ファラント (Richard Ferrant) に自分の聖歌隊の少年たちの指導を委ねた。ファラントはその時期ロンドンの聖ドミニコ会派の修道院の一部を劇場として借り受け、少年たちの芝居を一般に公開していた。これが第一次ブラックフライアーズ座である。そこで彼はウインザーとロンドンの二つの王室礼拝堂付き聖歌隊の共同による一般公演を行っていたのである。後に、ファラントの死後この劇場がオックスフォード伯爵の手に渡り、ジョン・リリーが実際の公演を取り仕切ることになる。

セント・ポール寺院付き聖歌隊学校の少年たちも、王室礼拝堂の聖歌隊と同じように演劇の指導を受けており、十六世紀の初め頃から、王や高位の要人などの招きに応じて劇を披露していたようである。1528年1月7日、ロンドン駐在のヴェネツィア大使の秘書ガスパロ・スピネッリ (Gasparo Spinelli) は、枢機卿ウルジー (Cardinal Wolsey) の招宴に出席していた。そのおり彼は、セント・ポールの少年たちがテレンティウスの『ポルミオ』(*Polmio*) を大変上手に動作を付けて演じたのを見て驚いたという⁶⁾。その後、およそ1534年頃から47年頃までの十数年

間、セント・ポールの少年たちを指導したのはジョン・レッドフォード (John Redford) である。彼は『知性と知識』(Wit and Science) というヘンリー八世への崇拜をこめた自作を聖歌隊の少年たちに上演させて好評を博してもいる。また、ジョン・ヘイウッド (John Heywood) がしばらくの間レッドフォードに協力して、少年たちを指導したり台本を書いたりしていたといわれている。レッドフォードの後を受けて聖歌隊学校の指導者となったのはセバスチャン・ウエストコット (Sebastian Westcott) である。彼はエドワード六世、メアリー女王の政情不安定な時期もうまく切り抜け、エリザベス女王の時代になってからは、セント・ポール少年劇団の黄金時代を築いた。1559年8月、女王はアランデル伯のナンサッチ城に行幸され、そのおり7日の夕には、セント・ポールの少年たちの芝居をご覧になった。これ以後一層ウエストコットは女王の厚い信頼をえ、82年に亡くなるまで23年間も指導者の位置に止どまり、27回以上も宮廷での公演を許されている。ことに前半の六七年まではその活躍の頂点にあり、1558年からの9年間で11回もの上演をし、王室礼拝堂少年劇団の2回、成人劇団の6回を大きく引き離している⁷⁾。

宮廷祝宴局

このように多様なテューダー朝宮廷のエンターテインメントを統括していたのが宮廷祝宴局である。この部局が宮廷内に正式に発足したのは1545年であるが、それ以前ヘンリー七世の時代から、大きな祝宴のあるときには、宮内大臣が臨時の祝宴担当官を指名し、全体の指揮と支払いを行わせていた。臨時の祝宴担当官は、同じく宮内大臣直下の宮廷衣装局(Office of Great Wardrobes) に属する宮内官を助手に用いて、実務的な仕事をさせた。その仕事の内容は「服地商や衣装局から織物などを、また宮廷宝飾品局や造幣局から装飾品を集める。設計者、大工、塗装屋、仕立屋、刺繍屋などを雇う。また、宴会場や馬上槍試合場で実際に指揮を取ったり、観客が高価で凝った山車から金めものを盗まないように気を付ける。衣装、仮装用具、小道具類の管理をする。最後に会計簿を提出して王室会計局(Exchequer)から支出した金の支払いを受ける⁸⁾。といったものであった。リチャード・ギブソン (Richard Gibson) という衣装局の役人は、こうした助手としてヘンリー八世の治世の初めから長く仕えた。彼の残した覚書には、グリニッチ宮殿の祝宴の場の装飾のために、高名な画家ハンス・ホルバイン (Hans Holbein) を雇ったことが記録されている⁹⁾。その後、祝宴関係の仕事はテント及び狩猟網を司る部局 (Office of Tents and Toiles) が兼務することになり、以後これらが正式に二つの部局に別れた後までも、祝宴局との密接な関係が続くことになる。

1545年、テント及び狩猟網局の責任担当官の地位が長官 (Mastership) となった。その地位にあったトマス・カワードン (Thomas Cawarden) は局長となったが、同年3月11日もう一つの辞命を受け、新たに恒久的な地位になった第一代宮廷祝宴局長 (Master of Revels) にも任命された。この時代、王の権威を誇示していく有効な手段として、宮廷でのあらゆる種類の演技、つまり芝居、仮面劇、仮装、騎馬試合などが多用されていたので、これらを取り仕切る祝宴局長をフルタイムで置く必要が大きくなったと考えられる。カワードンは局長、宮内官 (Yeoman) の他に、新たに会計係 (Clerk Comptroller) と帳簿係りの事務官 (Clerk) の地

位をテント局との併任で設け、宮内官が祝宴局では実務上の仕事に専念できるようにした。彼は1558年のエリザベス女王の戴冠式祝賀行事の指揮者として大任をはたし、翌59年8月死去するまで局長の地位にあった。彼の死後、テントと祝宴局の長官は分離され、祝宴局長にはトマス・ベンジャー（Sir Thomas Benger）が就任した。同時に祝宴会場の管轄がテント局から祝宴局に移った。

宮廷祝宴局では次第に宮廷内での芝居の上演にかかわる仕事の比重が大きくなっていった。宮廷周辺に属する王室礼拝堂やセント・ポール寺院の少年劇団だけでなく、大人の劇団を宮廷に召して上演させることも増えた。一方、王室礼拝堂やセント・ポール寺院などに属する少年劇団はいうまでもないが、1572年の「家臣取締法」と「浮浪者取締法」とによって、大人の劇団も直接間接の形で王室のパトロン制度の中に取り込まれることになった。つまり、この法の網を抜けるためには、女王の臣下である誰か有力な貴族にパトロンになってもらい、その家臣であるという形が必要になったのである。もちろんそれ以前から貴族のお抱え劇団というものはあるにはあったのだが、この法律ができて以来は確かな「身分証明書」がぜひ必要となったのである。このようにエリザベス朝の女王を頂点とするパトロン制度の中で、演劇上演についての要となっていたのが宮廷祝宴局長であった。彼の仕事は「さまざまな劇団を集め、その芝居を下見して、女王の御前公演にふさわしくない場合には、削除したり改変させたりする」¹⁰ことが主なものだった。「下見」によって公演不許可になるものも少なくなかったようである。1574年、宮内大臣サセックス伯ヘンリー・ラドクリフ（Henry Radcliffe, Earl of Sussex）をパトロンに戴く一座は、12月14日に祝宴局長の下見を受けたが、御前公演は許可されなかった¹¹。宮内大臣の一座でさえ基準に合わなければ没にされたのである。

ではこの基準とはどういうものだったのだろうか。どういう芝居が没になったり、削除や改変を必要としたのだろうか。結論的にいうとそれは危険思想の検閲というよりは、むしろ宮廷の趣味とレベルにより比重がおかれたものであったと思われる。サセックス伯一座の場合も彼らの芝居が洗練されているとは言い難かったために上演が許可されなかったのである。シェイクスピアの『夏の夜の夢』の中で、祝宴局長にあたるフィロストレイトが職人たちの芝居を下見したうで「御前には向きません」（V, i, 77）といったのは、彼らの芝居があまりにも稚拙粗野で宮廷のレベルにほど遠いという意味であった。エリザベス時代の祝宴局長の立場は、宮廷の平均的な考え方の範囲でコンセンサスを得ていたものであり、どちらの側にしても争いの種になるもの、あまりに個人的なコメントは不許可にするが、かといって洗練されたものであれば、いかなる論争もだめという訳ではなかった。思想という点からは、女王はなかなか現実的で、例えば、セント・ポール少年劇団の指導者セバスチャン・ウエストコットは隠れもないカトリック教徒であったが、女王は彼の才能を愛し、あえて信仰の件は問わずに生涯その地位にあることを許していたのである。後にリリーの生涯に大きな禍根をもたらしたマーティン・マーブレイト論争に関する宮廷祝宴局の措置も、この範囲で判断された結果であることには変わりない。

1572年7月、バーレー卿ウィリアム・セシル（William Cecil, Lord Burghley）は大蔵大臣（Lord Treasurer）に就任し、逼迫する国の財政立て直しに自ら取り組むことになった。彼は

祝宴局の見直しにも着手し、たまたま先月ベンジャーが死去した祝宴局に後任の長官を置かず、衣装局長ジョン・フォーテスク (John Fortesque) とテント局長ヘンリー・サックフォード (Henry Sachford) の二人に当面その役を併任させた。その間いろいろな改善案を出させたりしたが、他の部局との統合などの大幅な改革には到らなかった。祝宴局の役人の役割と特権を規制し、借財をしないですむような会計のシステムを考案、また会計簿、財産目録、日誌、元帳の記録と管理の強化、所有財産の貸し出し禁止等が主な改善点であった。

こういう中で1578年7月24日、エドモンド・ティルニー (Edmund Tilney) が宮廷祝宴局長の地位についた。彼の就任当時の宮廷は、女王とフランス王シャルル九世の弟アランソン公 (Duke of Alençon, later Duke of Anjou) との結婚話が進行中であった。イングランドにとって女王の結婚はスペインとフランスを相手にした外交作戦上最も高度な国家的事項である。従って、女王自身が二十歳以上年下で、醜い小人のアランソン公に対して戦略以上の気持ちを持っていないとしても、1581年、公がロンドンを公式に訪問されるにあたって、宮廷はその歓迎に万全を尽くさねばならなかった。宮廷祝宴局長としてのティルニーの最初の大仕事である。まず、同年4月20日、フランス側の使者団がロンドンに到着。6月14日までの滞在中、公式の饗宴だけでも4月25日には女王主催の晩餐会、27日はレスター伯、30日はバーレー卿主催の晩餐会、5月1日は熊いじめ (bear baiting) 見物、4日はサセックス伯主催の夕食会、6日から7日にかけてはハンプトン・コートでのティルト、15日から6日にはホワイト・ホールでのティルトと続いた。この間祝宴局は数回の槍試合と2回の仮面劇を準備した。いよいよ11月1日、アランソン公が訪英されると、数々の歓迎行事の頂点として、ティルニーはその冬のクリスマス・シーズンのために5つの芝居と仮面劇を2つ準備したのである¹²⁾。81年から2年にかけて祝宴局の経費は630ポンドであり、普通の年の二倍にのぼった。宮廷のエンターテインメントがそのもっとも華やかな時期だった。

リリーの宮廷デビュー

ティルニーが祝宴局長に就任した80年代の初め、ジョン・リリーも宮廷への第一歩を踏み出そうとしていた。彼が『ユーフイズ』の第二部『英国』 (*Euphues and his England*) を献呈し、そのころ秘書として仕えていたオックスフォード伯爵は、当時スキャンダルのため女王の信頼を失っており、宮廷での復権を模索していた。そのための一つの手段として、彼が第一に思い付いたのは、女王をはじめ宮廷の人々を楽しませる芝居の上演である。もともと伯爵自身がお抱えの劇団を持ち、喜劇の台本を書いたりもしていたので、これはむしろ彼の得意の分野であったといえよう。その上、いまそばには若く、野心に満ち、才能豊かなリリーがいて、その才能を発揮できる機会を待ち望んでいる。彼はこの計画を実現すべく動き出した。まず始めに、聖ドミニコ会派の修道院の一角にあった私設劇場ブラックフライアーズ座 (Blackfrais) の使用権を買い取って、それをリリーに与えた。この私設劇場は、もともとウインザーの王室礼拝堂付き聖歌隊の指導者リチャード・ファラントが借り受けて、1576年ごろからロンドンの王室礼拝堂聖歌隊も合併した少年劇団の芝居を一般の観客を対象として上演していた。ファラント死後、その借用権はロンドンの王室礼拝堂聖歌隊指導者ウィリアム・ハニスともう一人ジョ

ン・ニューマン (John Newman) という人物が継承していたが、その建物の所有者であるウィリアム・モア卿 (Sir William More) はもともと劇場として貸すことを好まず、ハニスが家賃を滞納しがちなのを機に返却をせまっていた。これを見て、ハニスとニューマンから借用権を買取ったのが、セント・ポール少年劇団の指導をしていたヘンリー・エヴァンス (Henry Evans) である。彼はウエストコットが非常に信頼していた人物で、演劇活動に関しては、少年聖歌隊長の地位を引き継いだトマス・ジャイルス (Thomas Gyles) より、真の意味でウエストコットの後継者といってもよかった。エヴァンスがブラックフライアーズを手に入れたのは、セント・ポール少年劇団にとってより大きな可能性のある常設の劇場を持つことが必要であると考えたからであろう。彼がその借用権をすぐにオックスフォード伯に譲り渡したのは、そうすることでより有利に大きな展開ができると見たからかもしれない。オックスフォード伯をパトロンとして、リリー、エヴァンス、ハニスが手を組んで少年劇団を動かしていけば、セント・ポール寺院内の劇場、ブラックフライアーズ座、そして宮廷と公演の可能性は広がるからである。

それぞれの思惑をのせて、1583年の夏ごろには、オックスフォード伯のお抱え一座、セント・ポール少年劇団、王室礼拝堂少年劇団 (ウインザーの少年たちの一部も含む) の合同からなるオックスフォード伯少年劇団ができ上がった。これはこの時代の最高水準を誇れる演技力と歌唱力を持った少年俳優と優秀なスタッフを備えた少年劇団であった。リリーがこの劇団のために書いた最初の芝居は『キャンパスピ』(Campaspe) である。書き上げるとさっそくブラックフライアーズ座での「リハーサル」公演を行った。リハーサルというのはこの種の私設劇場での一般公演のための言い訳である。宮廷での上演は、1584年の正月元日の夜 (new year's day at night) であると思われる。この公演と3月1日、懺悔火曜日 (Shrove Tuesday) の同じくリリーの『サフォーとファオ』(Sapho and Phao) の宮廷上演に対してジョン・リリーに20ポンド支払われたことが宮廷祝宴局会計簿に記録されている¹³⁾。

オックスフォード伯少年劇団は同年の冬のシーズンにも宮廷で芝居を上演したようである。祝宴局の会計簿には、12月27日に同劇団に対して6ポンド13シリング4ペンスが支払われた記録がある¹⁴⁾。このときの演目は『アガメムノンとユリシーズ』(Agamemnon and Ulysses) であつたらしいが台本は現存しない。支払いを受けたのはヘンリー・エヴァンスであった。しかし、以後この劇団についての消息はない。おそらくいろいろな理由で解散してしまったのであろう。もともとさまざまな利害を含んだ混成劇団で、不安がなかったわけではないが、消滅の主な理由は、本拠としていたブラックフライアーズ座が使えなくなったことであろう。1584年の復活祭のころ、返還を迫っていた地主トマス・モア卿は裁判に勝ち、リリー、エヴァンス、ハニスは同座から追い出されてしまった。この年の12月の最後の御前公演の支払いを受けたのがエヴァンスであったことは、必ずしもリリーが一座を去ったことを意味するわけではない。しかし、リリーにとって一応の目標である宮廷デビューを果たした上は、その手段であった同少年劇団が難しい問題を抱えている時、その存続にいささか消極的な態度になったのかもしれない。

しかし、リリーとセントポール少年劇団との関係はまだしばらく続く。これを裏付けるもの

としてよく引用される資料がある。一つは、1584年の12月、ジャック・ロバーツ(Jack Roberts)という男がサー・ロジャー・ウィリアムス(Sir Roger Williams)という人にあてた手紙の中で、いろいろな人物の噂話をした後、「リリーというオックスフォード伯に仕える者にはお気を付け下さい。もし、彼がこの手紙を見れば、印刷物にするか、セントポールの少年たちを使って舞台にのせてしまうでしょうから」¹⁵⁾と書いている。この手紙から、当時リリーがセントポール少年劇団に関係していたこと、また、時の人や話題になっている事柄を劇中に取り込むことで知られていたことが推察される。もう一つは、一時リリーとサヴォイで暮らしていたことがあるガブリエル・ハーヴェイ(Gabriel Harvey)の書いたものである。彼は、後年二人が仲たがいがいしたときさんざんな中傷を書き散らす、その中でリリーを“Vicemaster of Poules, and Foolmaster of the Theatre”¹⁶⁾と呼んで軽蔑しているところがある。中世道徳劇の道化ヴァイスと少年劇団の副指導者それに阿呆役などの意味を重ねた悪口で、「セントポール少年劇団の馬鹿教師」とでもいった意味である。これもまたリリーとこの少年劇団との関係を下敷きにしたものと解釈できる。だが、何よりも両者のつながりを明確に示すのは、リリーの芝居がその後もずっとセント・ポール少年劇団によって上演されていたという事実であろう。80年代後半の宮廷祝宴局の会計簿には、セントポール少年劇団の86～7年、87～8年、88年～9年、89年～90年の4回にわたる9つの上演が記録されており、支払いはトマス・ジャイルスに対してなされている。ここにはリリーの名前も作品も明記されていないが、しかし、1591年から2年に相次いで出版された『ガラシア』(Gallathea)『エンディミオン』(Endimion)『マイダス』(Midas)のタイトルページにはそれぞれ「グリニッチ宮殿に於いて正月一日の夜、女王の御前でセントポール少年劇団によって上演」「グリニッチ宮殿に於いて聖燭祭の日の夜、女王の御前でセントポール少年劇団によって上演」「十二夜に女王の御前でセントポール少年劇団により上演」と明記されている。これらを宮廷行事録¹⁷⁾とつきあわせると『ガラシア』『エンディミオン』が88年の正月1日と2月2日、『マイダス』が90年の1月6日に上演されたことが推定される。とすればこれら3作品がセント・ポールの少年たちによって女王の御前で上演されたと考えてもよいだろう。また、『マイダス』のテキストにはセント・ポール寺院内の劇場用のプロローグが付いているので、例によって宮廷上演前の「リハーサル」公演もあったと思われる。

宮廷祝宴局長を目標に

『キャンパスピ』でデビューして以来、リリーとセントポール少年劇団のコンビによる芝居は女王はじめ宮廷の人々に受け入れられ、喜ばれている様子がつぎつぎ行われた御前公演の記録からうかがえる。オックスフォード伯爵とリリーの当面の目標は達成されたと考えてもよいだろう。ことに伯爵にとってはこの試みは大成功ともいえるものだった。彼に対する女王の怒りはすっかり溶けたようであり、1586年には念願の年金も得ることができた。オックスフォード伯にとってこれはパトロンとしての女王に期待する最高のものであったらしい。1588年、セシルの娘である伯爵夫人アン(Arne Cecil, Countess of Oxford)が長年の不和と病身の果てに亡くなると、もう宮廷には現れず、数年後再婚するとともに、ハックニーへ隠棲してしまった。リリーは宮廷におけるパトロンを失ったわけである。もちろん、バーレー卿との縁まで切

れたわけではないが、セシルに娘婿への失望の気持ちがある限り、リリーとしても急にオックスフォードに代わるパトロンとしての役割を期待することもできなかったのかもしれない。それより、リリーは直接女王にその期待を向けたようである。

これまでに、少年劇団の芝居によって宮廷の喝采をあび、新しいエンターテイナーとしておおいに面目をほどこしていた一つの証拠として、リリーは女王から「(特別)郷土」(Esquire of the Body to the Queen Elizabeth, extraordinary) というの地位を与えられていた。これは宮廷への出入りは認められるが、実質は何も伴わない、つまり決まった義務もないかわりに無給の地位であった。経済的には必ずしも潤沢ではなかったこの時代のパトロン制度を巧みに操る女王は、有望で一応宮廷につながり止めておく必要を認めた人物に、時としてこのような地位を与えていたようである。また、リリーがこの頃宮廷祝宴局の中に何等かの地位を得たという説¹⁸⁾もあるが、1584年～6年当時の記録では、長官ティルニーの下の地位は、宮内官ウォルター・フィッシュ (Walter Fish)、経理担当事務官ウィリアム・ホーニング (William Honing)、事務官トマス・ブレイグレイブ (Thomas Blagrove)¹⁹⁾、と全部埋まっており、リリーの名前は無い。しかし、彼が祝宴局に出入りしそこで何らかの仕事に携わっていた可能性はある。そのころ、オックスフォード大学のクライスト・チャーチで行われた名誉総長レスター伯歓迎の余興のために、衣装を独断で貸し出した事件などがそれを物語る。だがこうした事実はあっても、おそらく祝宴局に正式な地位を得てはいなかったと思われる。確かなのは、リリーが正式な地位を、それも最終的には長官の地位を得ることを目標にしていたことだけである。

宮廷祝宴局長という地位は、少なくとも初代カワーデンからティルニーが就任した当時までは、それほど旨味のあるポストではなかったようだ。収入もカワーデンのころは年間十ポンドの固定給と日当、それに住宅などが貸与された程度であった²⁰⁾。しかし、1581年12月24日付けでティルニーに対して出された枢密院の特許は、祝宴局長の地位を権限と実益の両面で飛躍的に魅力あるものにした。この特許によって、演劇関係の総て、劇作家、台本、俳優、劇団、劇場などが一切祝宴局長の認可制になったのである²¹⁾。そこから新たな収入が得られるようになった。従来の固定給と宮廷への出仕の日当、住宅貸与(または手当)に加えて、職権上の収入が加算され、これがかなりな金額になったのである。総ての劇団は新作ごとに台本の検閲を受けることになったがその際の手数料と、実際に上演する際の公演許可料を長官に納入しなければならなかった。この他に四旬節期間中とか日曜日の公演など、禁止されている公演を特別に黙認するために得るいわば裏の臨時収入も大きかったとみられるから、年間百ポンド以上もが局長のサイフに入ったとされている²²⁾。ともかく宮廷祝宴局長のポストは1580年代以降、宮廷内の官職としては、質実を兼ね備えた魅力ある地位になっていたのである。

女王は1585年ころ、ブラックフライアーズ座返還によってリリーたちの試みが挫折したころであるが、リリーに対して将来の祝宴局長のポストをほのめかす言葉を与えたようである。そしてまたオックスフォード伯というパトロンとのつながりが切れた1588年ころには、「生涯を祝宴局で精勤するように」という前よりはっきりした言葉もあったようだ。もっともリリー自身「約束とはいわないが、次期候補(reversion)としての希望を持つように」²³⁾と励まして下さった、と述べているようにここでも女王は決して明言はしていなかったと思われる。以上のこと

は、後に失意のうちにリリーが女王へ宛てた二通の請願書から推測されることである。だが、当時女王からそのような「約束」をもらったリリーは、それまでにも増して、女王をパトロンと意識していくようになる。

1589年2月1日²⁴⁾リリーはウィルトシャー、ヒンドン市の都市選出議員になった。以後は選出場所をエイルズベリーやアップルビーに移したが、三回続いて議員となり、このときから後のエリザベス女王在位中に開かれた1593年、1597～8年、1601年の4回の議会総てに出席した。リリーが議員として特別に活躍したという記録はないが、少なくともまじめに努めたようだ。いわゆる「大学出の才人たち (University Wits)」のなかでも、ここまでの地位を得たものは他にいなかったのであるから、彼の身分としては極めて名誉なことであったと思われる。だが、リリーの議員選出には何か別の意図が隠されていたのではないだろうか。1589年の秋ごろから、リリーはマーチン・マープリレイト論争 (Martin Mar-Prelate Controversy) なるものにかかわっていく。その前年、1488年あたりから、英国国教会はマーチンと名乗る複数の清教徒たちによる猛烈なパンフレット攻撃を受けていた。その中心人物は分離主義者のヘンリー・バロウ (Henry Barrow)、聖職者のジョン・ペンリー (John Penry)、ウォリックシャーの郷土ジョブ・スロックモートン (Job Throckmorton) らであったといわれる。彼らの非難の対象は、国教会内部の腐敗、ローマ教会寄りの姿勢、主教たちの権威主義的態度などであった。とりわけ、最後の非難はきわめて具体性を帯びており、明らかにカンタベリー大主教ジョン・ワイトギフト (Archbishop of Canterbury, John Whitgift) とロンドン主教ジョン・エイルマー (Bishop of London, John Aylmer) に向けられていた。二人とも、1586年の枢密院星法院 (Privy Council, Star Chamber) の決定によって、総ての出版物の検閲と許可を一手に委ねられていた。非国教会派の出版物はことごとくここでチェックされたのである。これに対する清教徒らの反撥は強かった。1588年、『書簡』(Epistle) と『要約』(Epitome) と題するパンフレットが初めてマーチンの名で出され、この中で二人の主教をさんざんに非難した。国教会側の反論もあったがさっぱり功を奏さず、ロンドン市民までもマーチンの肩を持つような雰囲気になり、89年2月9日、後のロンドン主教リチャード・バンクcroft師 (Richard Bancroft) は、セント・ポール寺院の辻での説教で、国教会側も同様なパンフレットでマーチンに反撃すべきだと説いた。これによって、ついにワイトギフト大主教はこの論争に俗界の知恵を借りるのもやむを得ないと決心する。選ばれたのはジョン・リリーとケンブリッジ大学を出た青年トマス・ナッシュ (Thomas Nashe) であった。

国教会側の反撃要員に選ばれたリリーとナッシュは、1589年の初秋ころから、打ち合わせの上それぞれがマーチン側への非難、攻撃を散文や韻文の風刺、毒舌、戯画化などで行うことにした。ナッシュは『猿には鞭を』(A Whip for an Ape)²⁵⁾をはじめ矢継ぎ早に6、7編のパンフレットを書き精力的に活躍する。一方リリーの反マーチンものはというと、『手斧でよそうパンがゆ』(Pappe with a Hatchet) という題のパンフレットが唯一の現存するものである。だが、この他に、少なくとも一編以上の反マーチンの劇を書き上演しようとした、あるいは実際に上演した形跡がある。というのは、このパンフレットの中で、リリーは「書き下ろしたこれらの喜劇が上演されれば、かならず、やつは化けの皮を剥がれ、意気消沈するに違いない」²⁶⁾と

述べているところがあり、これが複数の反マーチン戯曲の存在を暗示しているからである。しかし、これらは一つも出版されず、いかなる形の台本も現存しない。リリーの反マーチン劇は上演許可を取れなかったのだろうか。この疑問について、あくまでも状況証拠以上のものではないが、ここに1589年11月12日付けの3通の手紙がある。星法院からそれぞれカンタベリー大主教ウィトギフト、ロンドン市長ジョン・ハート (John Harte)、宮廷祝宴局長ティルニーに宛てられたもので、市内外で公演している芝居に「神及び国家にかかわる不可侵のことがら」を主題にしているものがあるため、ウィトギフトとハートはそれぞれ学問見識ある適当な者を一人ずつ選んで、ティルニーの補佐に付け、3人で検閲のうえ許可を出すように、もし違反があれば厳しく罰することを指示している²⁷⁾。また、それに先立つ11月6日付けのロンドン市長ハートからパーレー卿に宛てた手紙には、海軍大臣一座とストレンジ卿一座を女王のご沙汰があるまで公演をみあわせるようにと命じているのに、ストレンジ卿一座がこれを無視したため公演の全面禁止の言い渡しを認めて欲しい旨が書かれている²⁸⁾。これらの手紙にあるロンドン市内外の芝居にすることがら反マーチン劇のことであるという決め手はないが、時間的な一致などから、かなりその可能性が高いといえる。とすれば、反マーチン劇は書かれたばかりでなく、少なくともそのうちの一つは実際に上演され、それがティルニーらの検閲によって抑えられたと見られる。

『手斧でよそうパンがゆ』の中で、リリーは「書き下ろした喜劇」について、「もしこれがポールで上演されれば、四ペンスで見られます」と欄外に記している。このことは反マーチン劇のうちの少なくともあるものがセント・ポール少年劇団によって上演された、あるいはされようとしたことを示すものである。これによって、同劇団は公演禁止という罰を受けたのである。セント・ポール少年劇団の封鎖に直接言及しているものとしてよく引かれる印刷業者チャールウッド (I. Charlewood) の残した言葉がある。1591年10月4日、書籍出版組合にウィリアム・ブルームという人の未亡人 (the widow of William Broome) によってリリーの『エンディミオン』『ガラシア』『マイダス』が登録された。このうち『エンディミオン』の冒頭にチャールウッドから読者へのメッセージが付いており、これによると「セント・ポール少年劇団が崩壊したため、たまたま、同劇団が女王陛下の御前で数回上演した幾つかの喜劇が私の手に入った」²⁹⁾とある。セント・ポール少年劇団が「崩壊した (dissolued)」のは、おそらくリリーがマーチン・マープリレイト事件に関係し始めたころから『エンディミオン』が登録された91年10月4日までの間のいつかであろう。この公演禁止命令は1599年まで続いた。セント・ポール少年劇団の封鎖は、事実上、リリーの劇作家としての活動の封鎖にもなったのである。

女王への請願書二通

1597年12月22日、リリーは父に代わってイングランドの宰相の地位についていたロバート・セシルに宛てて一通の手紙を送っている。そこで彼は「この12年間、女王のお約束が引き伸ばされたままの状態にじっと耐えてきた」にもかかわらず、「次期祝宴局長の地位を……出し抜かれてしまいました。バックがその地位を公認されたのです」³⁰⁾と述べて、積年の目標を失った深い落胆を表している。ジョージ・バック (Sir George Buc) にたいしてティルニーの次の祝宴

局長候補の地位が公式に認められたのはずっと先の1603年7月21日³¹⁾であるが、この年に非公式な指名があったのである。これより1、2年前、リリーは女王に請願書を提出し、「生涯祝宴局で精勤するよという有り難いおぼしめし（ご確約とは申しませんが、次期祝宴局長に希望をつなぐよというおぼしめしと心得ます）に力付けられてこの十年間励んでまいりました」³²⁾が未だに何のご沙汰もないことを訴え、「約束」の履行を請うている。しかし、セント・ポール少年劇団の謹慎命令によって、主な活動の場を失ったあと、失意のリリーを支えて来た唯一の希望は、バックの次期長官指名によって完全にその灯を消されてしまったのである。リリーを長年宮廷につなぎとめてきた祝宴局長の地位への「関心と希望」は、エリザベス朝の権力行使について言えば、きわめて特徴的なものであった。経済的な基盤が弱く、職業的な軍隊や官職の地位が総ての必要な人材を確保するにはとうてい不十分な状況で、何とか円滑な行政を行って行くためにエリザベス女王がとった方法は、大多数の支配階級の人々に官職に対する関心を持たせ、つまり名誉と実益をちらつかせ、その地位に付く希望を抱かせるような恩寵を見せていくことであった。こうしたパトロン制度の運用は、いわばエリザベスという女王の資質に合ったものであり、当座必要とする多くの人材を宮廷につなぎとめておくことができた。当然、そういう希望を持たされた人の数は多く、希望が実現せずに失意のうちに宮廷を去る人の数も多かった。実際の地位は、個人の能力以上に、宮廷内の力関係、つまりどのくらい有力なパトロンの推挙が得られるか、そしてエリザベスがそれら有力者の間にどのように恩寵を配分して権力のバランスを保つかによって決定されていたのである。

1579年以来宮廷祝宴局長の地位にあったエドモンド・ティルニーは、エフィンガム伯チャールズ・ハワード（Charles Howard, Earl of Effingham）の縁者で、伯爵の強力な推挙によって長官の地位を得た。ハワード家は女王の母アン・ブリン（Anne Boleyn）の家系につながる代々の有力な貴族で、その宮廷内における力は、さらにティルニーの権限を大幅に拡大した1581年の特許をも獲得してやったことで十分示された。ハワードら古くからの貴族勢力に対抗する新しい勢力である有能な官吏たちの頂点にいたのはパーレー卿ウィリアム・セシルであり、彼につながるリリーも、特許によって魅力の増した祝宴局長の地位への希望を持つことを許された。しかし、希望を持っていたのはリリー一人ではなかった。もっとも強力なライバルはティルニーの甥であるジョージ・バックである。結果的にはバックが希望を実現し、リリーの目標は消えた。リリーの敗北の原因がマーチン論争にかかわって、当局の検閲に引っ掛かったためかどうかは定かではない。あるいは、リリーがパトロンと頼んだセシルがどの程度彼を援護したかが鍵だったのかもしれない。おそらく政権の中枢にいた彼のところには多くのクライアントが地位を求めて集まっていただろう、リリーはその中の一人に過ぎなかったのかもしれない。リリーに希望を持たせたのは、セシルの力というよりは、女王自身がリリーの芝居を評価されたためであったと見るほうが妥当であるかもしれない。しかし、リリーが芝居の変革を探り始めたころから³³⁾女王にはリリーを無理に宮廷につなぎとめておく気持ちが薄れていった。「約束」はリリーの側でのみ膨らみ続け、無残にも空中に消えた。

バックが次期長官の内定を得たとき、リリーはロバート・セシルに宛てて訴えの手紙を送ったが、セシルからの返事はなかった。その後も再度手紙で訴えたがやはり返事はなかった。ロ

バートは老齢と病のため死の床にある父の代わりにエッセクスの事件など重大な国事に忙殺されていた時期ではあったが、やはりリリーの訴えに何の反応も示さなかった点に、長く続いたリリーとセシルとのパトロン—クライアント関係の終焉があったと見るべきであろう。リリーは1601年、最後の請願書を女王陛下に宛てて提出し、祝宴局をあきらめて、密接に関連したテントと狩猟網を担当する部局の地位を願った。しかし、やはり結果は同じで、女王からの返答はなかった。自らの文筆の力でパトロンを求め、祝宴局長の地位を得ることを目標にしたリリーの戦いは終わったのである。

1606年、シェフィールドのセント・パーソロミュー・ザ・レスの教区日誌は「紳士ジョン・リリー、11月30日埋葬」として、リリーの死を記録している。

注

- 1) Strong, R. C., "The Popular Celebration of the Succession Day of Queen Elizabeth I", *Journal of the Warburg & Courtauld Institutes*, xxi, 1958, pp. 86-103.
 - 2) Feuillerat, A. ed., *Documents Relating to the Revels at Court in the time of King Edwards VI and Queen Mary*, 1914 (Materialien xlviv) pp. 77-81.
 - 3) Loades, David, *The Tudor Court*, London, B. T. Batsford, 1986, pp. 105-106.
 - 4) Chambers, E. K., *The Elizabethan Stage*, Oxford, (1923) 1974, vol. IV Appendix A "A Court Calendar", p. 77.
 - 5) Hall, *Chronicle*, 513. (Loades, op. cit., p. 107)
 - 6) Calendars of State Papers, Venetian, IV (1523-33) 225. (Gair, R., *The Children of Paul's*, Cambridge U. P., 1982, p. 7.
 - 7) Chambers, *op. cit.*, vol. II, p. 4.
 - 8) *Ibid.*, vol. I, p. 72.
 - 9) *Ibid.*
 - 10) Feuillerat, Albert (ed. with notes), *Documents relating to the Office of the Revels in the Time of Queen Elizabeth*, (Materialien xxi), (Louvain, A. Uystruyt, 1908) Kraus Reprint, 1968, p. 191.
 - 11) Barroll, J. L., *The Social and Literary Context*, Clifford Leech T. W. Craik (eds.), *The Revels History of Drama in English*, Methuen, 1975, vol. III, p. 4.
 - 12) Chambers, *op. cit.*, vol. IV, Appendix A "A Court Calendar", p. 98.
 - 13) *Ibid.*, vol. IV, Appendix B "Court Payments", p. 160.
- なおこの日付については、Bondは1952年1月1日と2月27日としているが、Chambersの宮廷暦 (Chambers. *op. cit.*, vol. IV, p. 100), 及び Hunter の主張する1584年1月1日と3月3日のほうが妥当と思われる。
- 14) Chambers, *op. cit.*, vol. IV, Appendix B "Court Payments", p. 160.
 - 15) Bodleian MS, Tanner 169f. 69v (Hunter *op. cit.*, p. 75)
 - 16) Harvey, Gabriel, "An Advertisement for Pap-Hatchet" in *Pierce's Superrogation*, Alexander B. Groars ed., *The Works of Gabriel Harvey*, AMS, 1966, Book II, p. 212.
 - 17) Chambers, *op. cit.*, vol. IV, Appendix A "A Court Calendar" pp. 161-163.
 - 18) 例えば Bond などの説。
 - 19) Chambers, *op. cit.*, vol. I, pp. 95-96.

- 20) *Ibid.*, p. 94.
- 21) *Ibid.*, vol. IV, Appendix D “Documents of Control”, pp. 285-286.
- 22) *Ibid.*, vol. I, p. 94.
- 23) Lyly’s 1st Petition to the Queen, Harleian MS 1323, fols. 249-250. (Bond, *op. cit.*, vol. I, pp. 64-65)
- 24) Bondなどは1588年2月1日とするが、この場合 Hindon 市選出議員と Martin 論争との関係がほとんどなくなる。
- 25) Lyly の作という説もあるが、Bond は Nashe 作としている。(Bond, *op. cit.*, vol. III, p. 415)
- 26) Lyly, John, *Pappe with an Hatchet*, Bond., *op. cit.*, vol. III, p. 408.
- 27) Chambers, *op. cit.*, vol. IV, Appendix D “Documents of Control”, pp. 306-307.
- 28) *Ibid.*, pp. 305-306.
- 29) “The Printer to the Reader” affixed to the *Endimion* 1591 edition. (Bond, *op. cit.*, vol. III, p. 20)
- 30) Letter, “For the right ho. Sir Robert Cecil”, State Papers, Domestic, Elizabeth, vol. 265, fols. 128-129, No. 61. (Bond, *op. cit.*, vol. I, pp. 68-69)
- 31) The Cal. of State Papers, Domestic, 1603-1610, p. 16. (Bond, *op. cit.*, vol. I, p. 68f)
- 32) Lyly’s 1st Petition. (See note 23)
- 33) この点に関しては、拙著「ジョン・リリー『占いはあさんボンビー』—“不安の実験”—の周辺」（信大医短『紀要』 15巻1号 1989）に詳しく書いたので参照されたい。

受付日：1995年10月5日

受理日：1995年11月21日